令和8年度奥会津7町村文化施設間連携企画展
「奥会津の道　街道と鉄道　人・もの・文化が行き交う」の関連イベントとして開催
令和8年度　郷土の歴史講座　第4回学習会資料　令和8年9月27日（日）

『八十里越新道記』を読む

～南山御蔵入代官・平岡文次郎の功績～

奥会津博物館
文化財専門員
渡部康人

目　次

1　はじめに
2　民衆から愛された代官▪平岡文次郎
3　江戸幕府による南山御蔵入支配と平岡文次郎
4　『八十里越新道記』の構成と第1部を紹介
5　『新編会津風土記』から見る八十里越
6　八十里越改修のきっかけは、天明の大飢饉
7　『八十里越新道記』第2部から見る平岡文次郎の動静
8　「水原13人衆」と福島潟干拓
9　平岡文次郎、幕府に八十里越改修を願い出る
10　『八十里越新道記』第2部から見る改修工事
11　『八十里越新道記』第3部　裏八十里越改修の動き
12　「八十里みち」と刻された道標2つ
13　写真で見る八十里越

1　はじめに

①八十里越は、越後国蒲原郡村松藩領吉ヶ平村(新潟県三条市)と陸奥国会津郡南山御蔵入黒谷組叶津村(福島県南会津郡只見町)をつなぐ約26kmの峠道である。

②会津藩が編さんし文化6年(1809)に完成した「新編会津風土記」には、牛や馬を用いた米や塩の運送は、道が険しく出来なかったと記されている。

③この現状をうれいた平岡文次郎は、天保13年(1842)江戸幕府に八十里越を牛や馬を用いた運送ができるように道幅2間(約3.62m)にするよう要請した。

④その願いは聞き入れられ、八十里越の改修は天保14年(1843)10月に完成した。

⑤『八十里越新道記』は、下山村(福島県南会津郡南会津町下山)の名主・馬場順平が編さんし、天保14年11月に完成した。

⑥本書は、3部に構成されている。

⑦1部は、平岡文次郎を礼賛する俳諧歌(和歌)が収められている。

⑧2部は、この改修工事に関する種々の文書の写しが収められてる。

⑨3部は、裏八十里越と称される大谷(新潟県三条市大谷)と蒲生村(福島県南会津郡只見町蒲生)を結ぶ峠道の改修を願い出た文書の写しが収められている。



馬背輸送模型　奥会津博物館道コーナーに展示


各八十里越道の概図
大谷
吉ヶ平村
守門川
越後国蒲原郡村松藩
吉ヶ平村（新潟県三条市）
五十嵐川
鞍掛峠
仮称「木の根小屋」
守門岳（1537m）
江戸幕府直轄地（元高田藩領）
越後国魚沼郡御蔵入大白川新田村
（新潟県魚沼市）
江戸幕府直轄地
陸奥国会津郡
南山御蔵入叶津村
（福島県南会津郡
只見町）
南会津郡
真奈川
蒲生川
只見町
大峯坂
大二本坂
大三本坂
小三本坂
小三本沢
山神坂
叶津川
叶津番所
鐘金へつり
入叶津
蒲生村
只見川
凡例
八十里越道
裏八十里越道
国道 289 号八十里越道（令和 9 年夏頃開通予定）

2　民衆から愛された代官･平岡文次郎

テレビの時代劇では、悪の象徴として描かれることが多い代官。どうして平岡文次郎(以下、平岡と記す)は民衆に愛されたのだろうか。

八十里越新道改修事業で大きな役割を果たした平岡の業績については後に紹介するが、ここでは他の業績について主なものを紹介する。

①南山御蔵入は、高冷地のため米の生産力が低かった。そのため、年貢として収められた米は、地域の蔵で保管され、民衆の食料米として供給されていた。これを「現払米」(現金払いの米)といった。

②民衆は供給を受けた米の代金を地域の米相場の平均の価格で返済した。平岡が赴任した頃の米代金は通常と比べて非常の高値で民衆は困っていた。平岡は幕府に対し、米代を安くしてほしいと意見し、米代は安くなった。

③飢饉対策でジャガイモの種を配布し栽培を奨励した。

④年貢の対象とならない田の畦(あぜ)に、大豆類を植えることを奨励し、民衆の食料確保を図った。

⑤南山御蔵入の特産物である麻･絹･カラムシ･和紙･煙草･薬用人参等を積極的に他領への販売を推進した。

⑥南山御蔵入の特産物である麻・絹・カラムシ・和紙・煙草・薬用人参等を積極的に他領への販売を推進した。
⑦民衆が抱えていた借金について、平岡は幕府と交渉し、大幅な返済期間延長を認めさせた。

このように、平岡は民衆のメリットになることを積極的に推進した。これらのことが平岡が民衆から愛された理由であると考えられる。平岡の南山御蔵入代官退任の噂が流れると、留任を求めて民衆が老中に訴えた一幕もあった。

参考文献
『近世会津史の研究』下巻
「天保改革期における陸奥代官領について（二）」『福島県歴史資料館研究紀要』第13号
『田島町史』第10巻

3　江戸幕府による南山御蔵入支配と平岡文次郎

①平岡文次郎は、南山御蔵入を統治するため江戸幕府から派遣された代官である。
②江戸幕府直轄地である南山御蔵入誕生のおおまかな経緯は以下のようなものである。
③三代将軍・家光は当時の会津藩主・加藤明成と重臣・堀主水との確執により両者の関係性が極めて悪化していることにかんがみ、一旦会津藩40万石を取り潰した(参考文献:『徳川実紀』)。
④家光は、会津を南北に分割し、北部を会津藩23万石(現在の新潟県東蒲原郡阿賀町や新発田市の一部を含む)とし、自身の異母兄弟である保科正之を山形藩から移封し藩主とした。
⑤そして南部の山岳地帯の南山5万石を御蔵入とした。南山御蔵入の誕生である。
⑥これは寛永20年(1643)7月のことである(参考文献:『会津藩家世実紀』)。
⑦御蔵入とは、年貢(税金)がすべて将軍の財布に入る領地のことである。
⑧南山御蔵入の統治は実にややこしい。江戸幕府は、南山御蔵入の統治を度々会津藩に任せている。この変遷を次に示す。

南山御蔵入の統治形態の変遷表　その①

統　治　形　態	期　間	年　数
第1回　会津藩による代行統治	寛永20年(1643)～元禄元年(1688)	45
第1回　江戸幕府の直接統治	**元禄元年（1688）～宝永2年（1705）**	17
第2回　会津藩による代行統治	宝永2年(1705)～正徳3年(1713)	8
第2回　江戸幕府の直接統治	正徳3年(1713)～享保7年(1722)	9
第3回　会津藩による代行統治	享保7年(1722)～宝暦5年(1755)	33
第3回　江戸幕府の直接統治	宝暦5年(1755)～宝暦13年(1763)	8
第4回　会津藩による代行統治	宝暦13年(1763)～天保8年(1837)	74
第4回　江戸幕府の直接統治	天保8年(1837)～弘化4年(1847)	10
第5回　会津藩による代行統治	弘化4年(1847)～文久3年(1863)	16

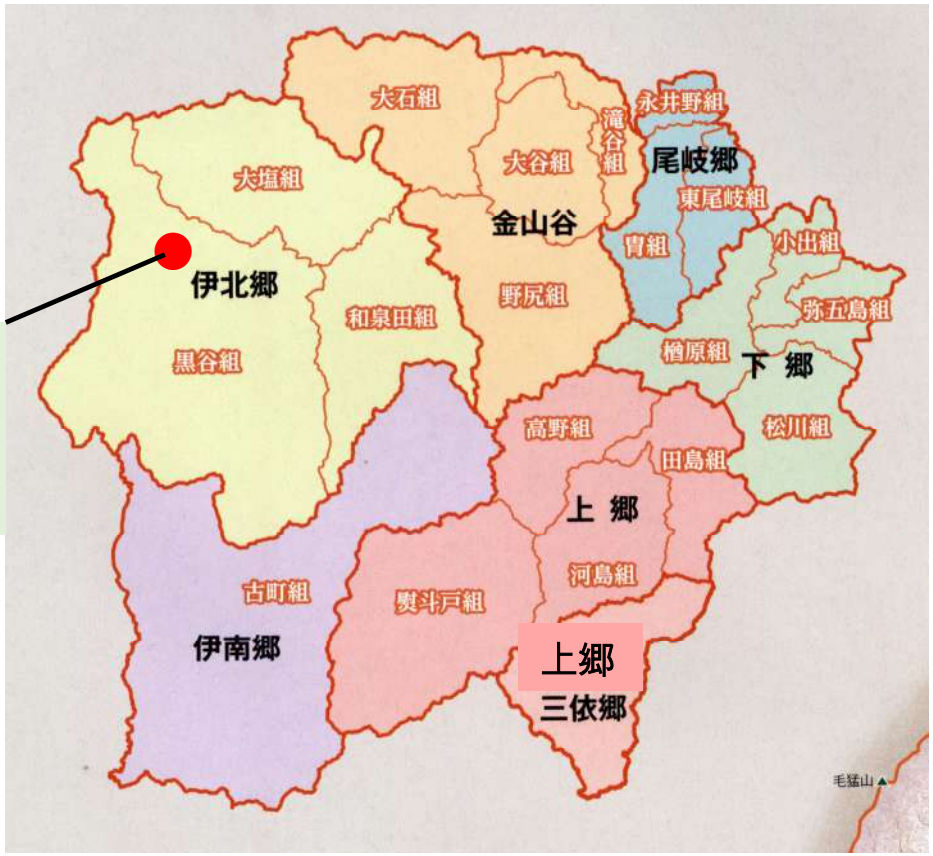
南山御蔵入の統治形態の変遷表　その②

統　治　形　態	期　間	年　数
※南山御役知(会津藩代行統治)	文久3年(1863)～慶応3年(1867)	4
大政奉還にともない江戸幕府が消滅し御蔵入でなはくなるが、戊辰戦争時も会津藩が実質的に統治していた。	慶応3年(1867)～慶応4年(1868)	1

※南山御役知＝江戸幕府は、京都守護職を勤める会津藩主・松平容保に対する財政援助の一環として、南山御蔵入の年貢金約1万両(約12億5000万円)を会津藩に納入する措置を講じた(参考文献:「京都守護職に対する財政援助」『お茶の水史学』第45号)。

●江戸幕府は、職務に対する報酬を確保する領地を御役知と呼んだ。
そのため南山御役知と称された。

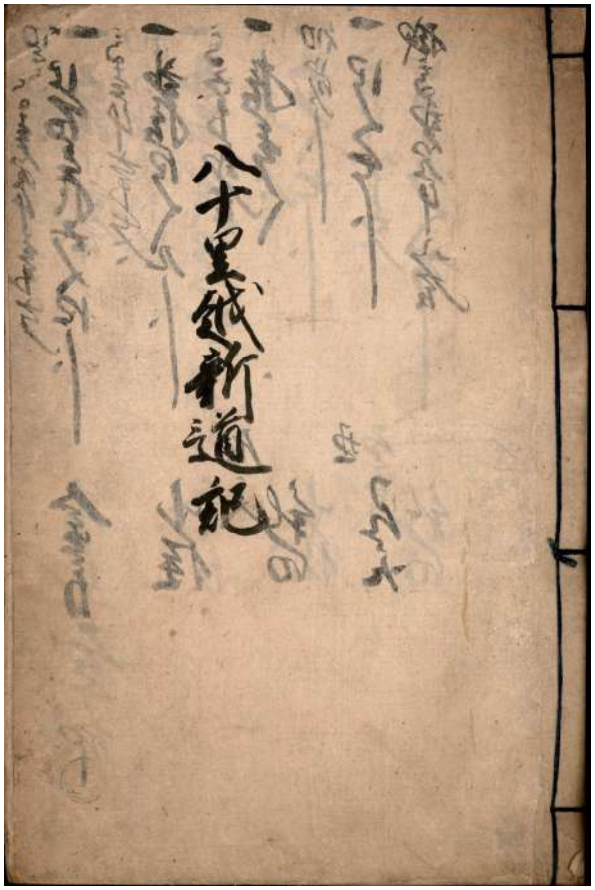
●京都守護職は、慶応3年(1867)10月の大政奉還とともに消滅した。



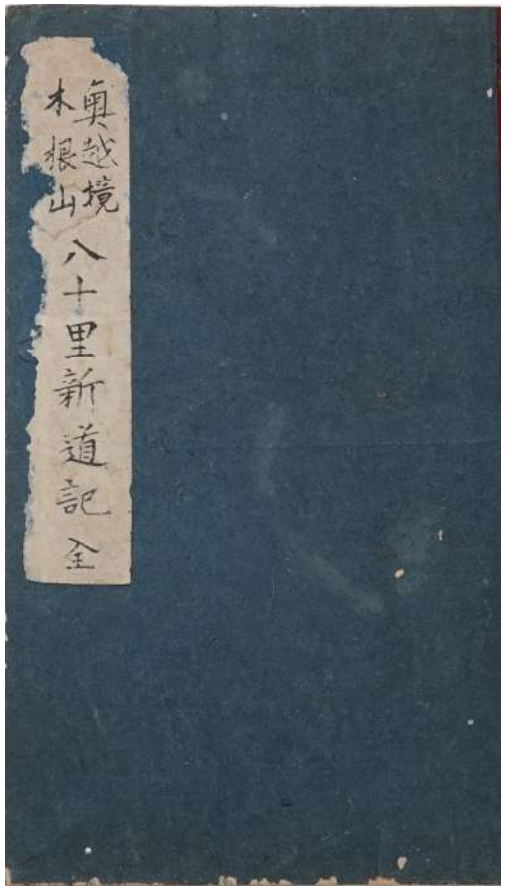


・南山御蔵入は、行政区域として6郷・19組・271村が存在した。
・郷の代表者は無し。組の代表者を郷頭(ごうがしら)、村の代表者を名主(なぬし)と呼んだ。
・八十里越の叶津番所は、陸奥国会津郡南山御蔵入黒谷組叶津村(南会津郡只見町)にあった。
・南山御蔵入に属した市町村は、南会津郡、大沼郡昭和村・金山町・三島町・会津美里町高田地域の大部分、河沼郡柳津町南部、会津若松市のごく一部、栃木県日光市三依地域。面積約3300㎢。

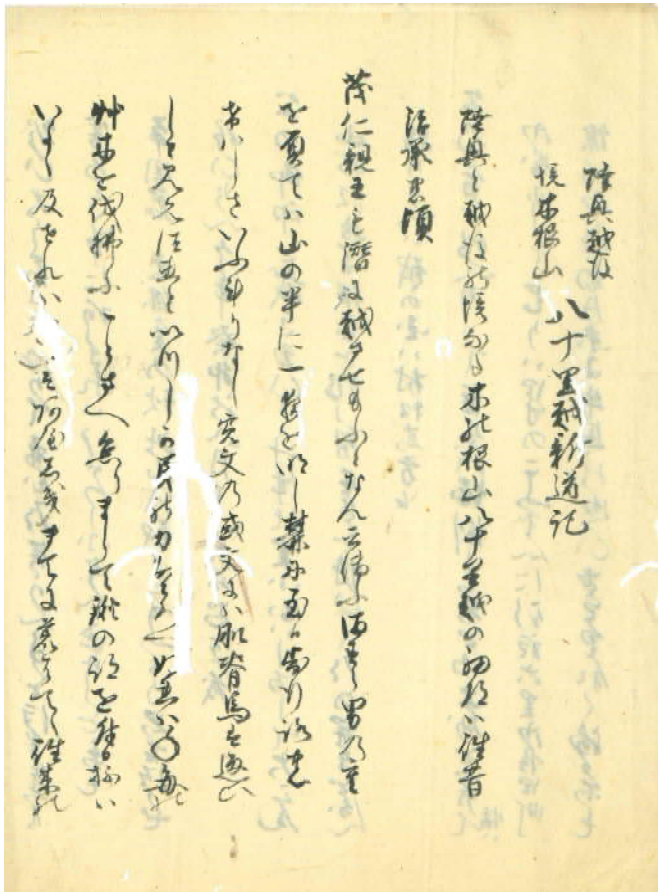
4　『八十里越新道記』の構成と第1部を紹介



『八十里越新道記』
南会津町中荒井　渡部雅俊氏所蔵



『奥越境木根山　八十里新道記全』
南会津町鴇巣　馬場家文書
福島県歴史資料館寄託



『陸奥越後境木根山　八十里越新道記』
南会津町白沢　大宅家文書

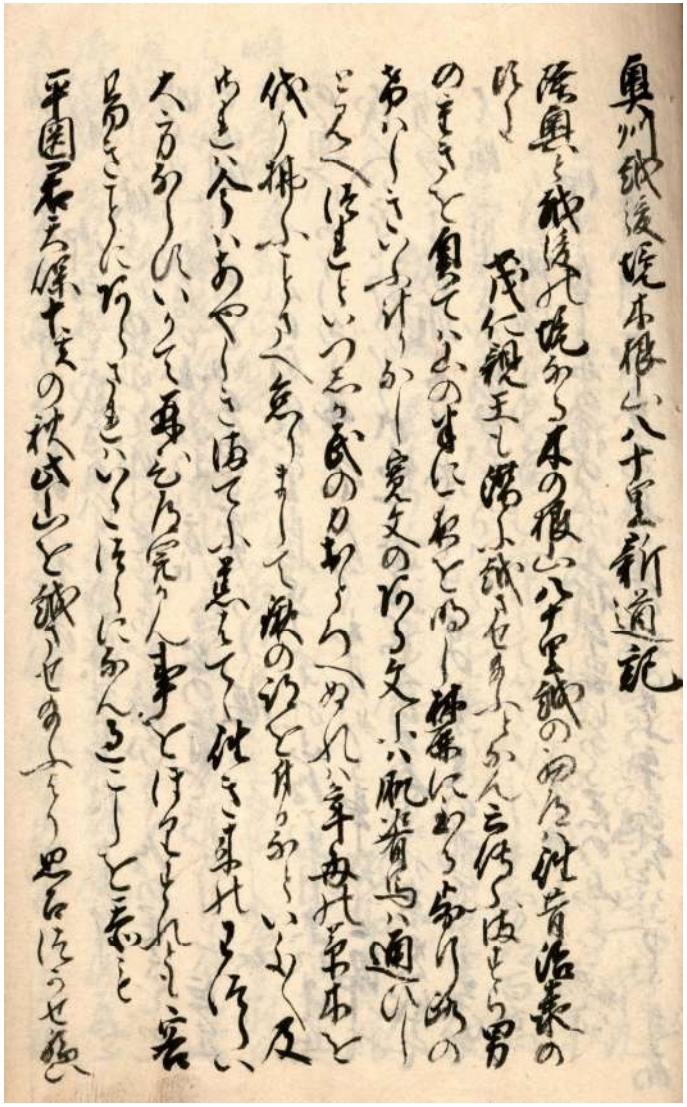
●『八十里越新道記』(80頁)は、3部構成になっている。

第1部＝平岡文次郎を礼賛する文学作品になっている。
　　羽染筈高(伊南白沢の豪商で歌の達人)と、
　　その門弟等によって綴られている。
　　また、改修以前の八十里越の現状が記述。

第2部＝平岡文次郎が主導した改修工事に関するもの。

第3部＝裏八十里越改修の要望書に関するもの。

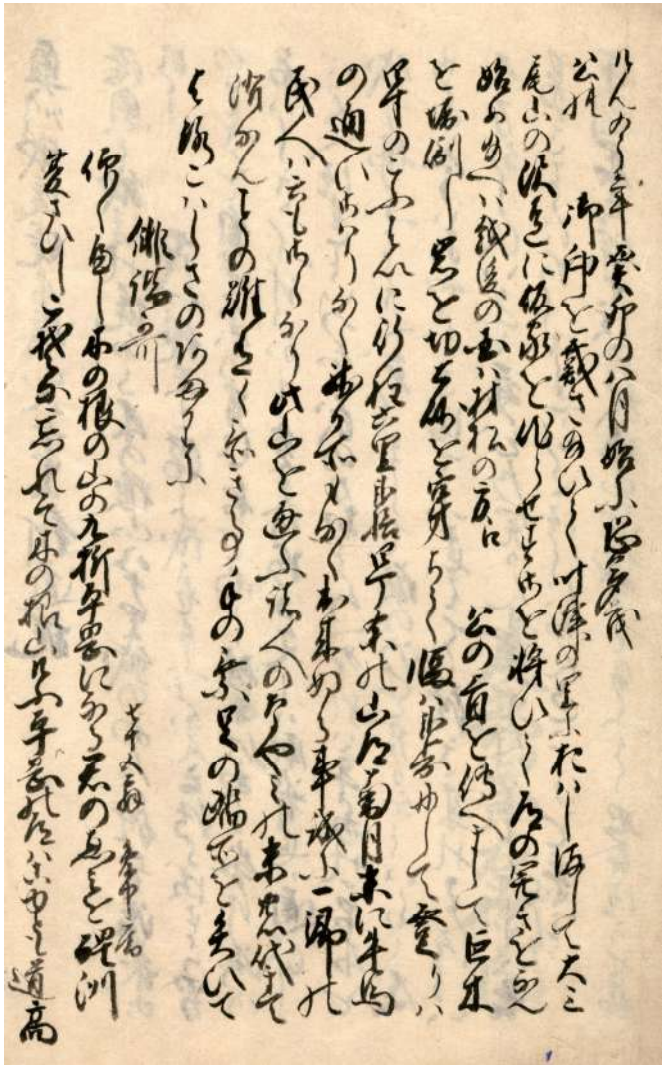
『八十里越新道記』第一部（渡部雅俊氏伝世本）



奥州越後境木根山八十里新道記

陸奥と越後の境なる木の根山八十里越の細道ハ往昔治承の頃に　茂仁親王も潜に越させ給ふとなん言伝ふますら男の重きを負て八山の半に一夜を明し麓に至る歩行路のけハしきいふ計りなし、寛文のある文にハ、肌背馬ハ通ひしと見へつれといつしか民の力おとろへぬれハ、年毎の草木を伐り拂ふことさへ怠り、まして鍬の跡を付るなといよく及されハ今ハあやしきまでに荒はてゝ、往き来のわつらい大方ならすいかて再ひ道開かん事をほりすれとも容易きことにあらされハ、いたつらになん過こしを忝も平岡君天保十亥の秋、此山を越させ給ふより思召つかせ給ひ

陸奥（会津）と越後（新潟）の国境にある「木の根山（八十里越）」の細道は、はるか昔の治承年間（平安時代末期）に、以仁王（もちひとおう）が密かに越えられたという伝説が残っているほどの古い道である。強い男たちが重い荷物を背負って歩いても、あまりの険しさに山の途中で一晩を明かさねばならず、麓に至るまでの歩行路の険しさは言葉では言い表せないほどである。寛文年間（江戸時代初期）の古い文書を見ると、「かつては馬の背に荷物を載せて通ることができた」と記されている。しかし、いつの間にか人々の力が衰えてしまい、毎年行うべきルート上の草刈りや木々の伐採すら怠るようになってしまった。ましてや、鍬を入れて道を整備することなど到底できなくなってしまったため、今では不気味なほどに荒れ果ててしまい、ここを行き交う人々の苦労は並大抵のものではない。「なんとかして、もう一度この道を切り開きたい」と誰もが願ったものの、そう簡単なことではなく、何もしないままむなしく年月が過ぎていった。ところが大変ありがたいことに、代官である平岡君（平岡文次郎）が、天保十年（一八三九年）の亥の年の秋にこの山を実際に越えられた。



けん、今年癸卯の八月始に恐多も
公の　御印を戴き給ひて、叶津の里におはしまして大三
尾山の沢辺に仮家を作らせすさを将ひて、道の開きをなん
始め給へハ、越後の国八村松の方江　公の旨を伝へまして、巨木
を掘倒し、岩を切、土砂を穿ちて、幅八弐歩にして、登りハ
四寸のこふはいに行程六里弐拾四丁余の山道、菊月末に牛馬
の通い、さハりなく残る所もなく出来ぬる事誠に一郷の
民人ハ云もさらなり、此山を通ふ諸人のなやミの末の代まて
消なんことの有難く忝き事、手の舞、足の踏所を失ひて
よろこハしさのあまりに、

俳諧歌　　七十五翁　夢中庵

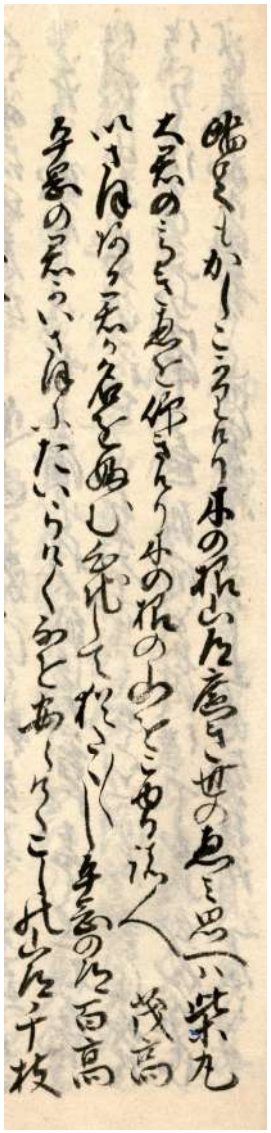
仰くへし、木の根の山の九折、平岡になる君の恵ミを、醒州
夏さひし、こそな忘れそ、木の根山けふ、平岡の道ハこゆとも　道高

今年の癸卯(みずのとう)の年の八月初めに、恐れ多くも公認の許可印をいただき、叶津の集落においでになって、大三尾山の沢沿いに仮小屋を建て、人足を率いて道の切り拓きをお始めになりました。越後の国は村松の方へもお上の旨を伝え、巨木を掘り倒し、岩を切り裂き、土砂を掘り穿って、幅は二歩(約三・六m)、登りは四寸の勾配(百歩進んで四寸上がるなだらかな傾斜)とし、行くこと六里二十四丁余り(約二十六km)の山道を整備されました。菊月(九月)の末には、牛や馬の往来が何の障りもなくできるよう、残る所なく道が完成いたしました。これは誠に、この郷の民人は言うまでもなく、この山(八十里越)を通行する多くの旅人の苦しみが、末永い未来の世代まで消え去るということであり、有り難くももったいないことです。人々は手の舞い足の踏む所を忘れる(手舞足踏：興奮して踊り狂う)ほどに喜び、そのあまりに歌を詠みました。

俳諧歌

●「仰ぐべし　木の根の山の九折(つづらおり)　平岡になる　君の恵みを　夢中庵醒州」
(これまで見上げるようだった)あの険しい木の根山の九十九折りの険路が、平らな岡のようになった。これは全て平岡様の恵みのおかげであり、深く敬うべきである。

●「夏さひし　こそな忘れそ　木の根山　けふ平岡の道はこゆとも　道高」
かつて夏でも寂しく険しかった木の根山の苦難を、決して忘れてはならない。今日、このように平らで歩きやすくなった岡の道を越えていくとしても。



踏足も、かしこかりけり、木の根山、道広き世の恵ミ思へハ　柴丸
大君の、高き恵を仰けり、木の根の山をこゆる諸人、　茂高
いさほなる、君か名をふむ心地して、猶たくし平岡の道、　百高
平岡の、君かいさほにたいらけくなを安らけく、こしの山道、　千枝

●「踏足も、かしこかりけり、木の根山、道広き世の恵ミ思へハ　柴丸」

かつては足を踏み出すのさえ恐ろしかった木の根山であるが、道が広く整備された今の御代の恵みを思うと、そのありがたさに恐れ入るばかりだ。

●「大君の、高き恵を仰けり、木の根の山をこゆる諸人　茂高」

この木の根の山を越えていく多くの人々はみな、平岡様の山よりも高い偉大な恵みを仰ぎ見ていることよ。

●「いさほなる、君か名をふむ心地して、猶たくし平岡の道　百高」

これほどの勲功を立てられた平岡様の名を踏んで歩くような恐れ多い気持ちがするほど、まっすぐに平らになった平岡の道（平岡様が作られた道）よ。

●「平岡の、君かいさほにたいらけくなを安らけく、こしの山道　千枝」

平岡の殿様の素晴らしい功績によって、この越（こし）の山道（木の根山を越える道）は、本当に平らで、さらに安全で安心な道になったことだ。

5　『新編会津風土記』から見る八十里越(要約)　会津藩が編さん　文化6年(1809)完成

①村中より漸々(ようよう)に登り、5里12町(約21㎞)頂上に至る。

②この間に鍵金嵓(かぎかねへつり)・山神坂・小三本坂(こさんぼんさか)・大三本坂(おおさんぼんさか)・大峯坂等の名あり。

③道きわめて険しく牛馬を用いた運送はできない。

④嶺はすなわち陸奥・越後の界なり。ここを越えて村松領蒲原郡吉ヶ平村および同郡下田村(いずれも新潟県三条市)に至る。

⑤坂東道(6町＝1里(約654m))で八十里あり、よって八十里越の名ありと云う。

⑥けれども、坂東道で八十里というのも合わない(美称の一例か)。

⑦旅人通行するに春夏の間も払暁にこの村(叶津村)を出て、日没の頃ようやく吉ヶ平村に至る。

⑧重い荷物を背負った人は頂上に至る前に日暮れになってしまう。

⑨このように嶮岨(けんそ)の山路を行く中で天気悪ければ通行が困難になる。

⑩ゆえにここを過ぎる者は必ず数日の食料を携帯して行く。

⑪村民(叶津村民)常に頂上に小屋を構え、炊飯具を常備しておき、往来の人を助ける。

⑫よって旅人この小屋に泊まり、天気が回復するのを待つ。

⑬泊まった旅人は宿泊費を置いていく。

⑭(叶津村の)小屋主は、5、7日に一度小屋に来て、食料等の不足分を補い、旅人がおいていった宿泊費を回収していく。

⑮旅人がこの宿泊費を盗るものはいない。

⑯これはこの地域の美風である。

6　八十里越改修のきっかけは、天明の大飢饉

①天明3年(1783)7月に浅間山が大噴火し甲信・関東・奥羽では火山灰が降り、日照が遮られ冷夏になった(『国史大辞典』第9巻)。

②奥会津の大豪商・細井家の当主が記した日記には、「秋彼岸になっても、この辺一帯では、稲の穂が一切実らず、大騒ぎになった」(要約)とある。

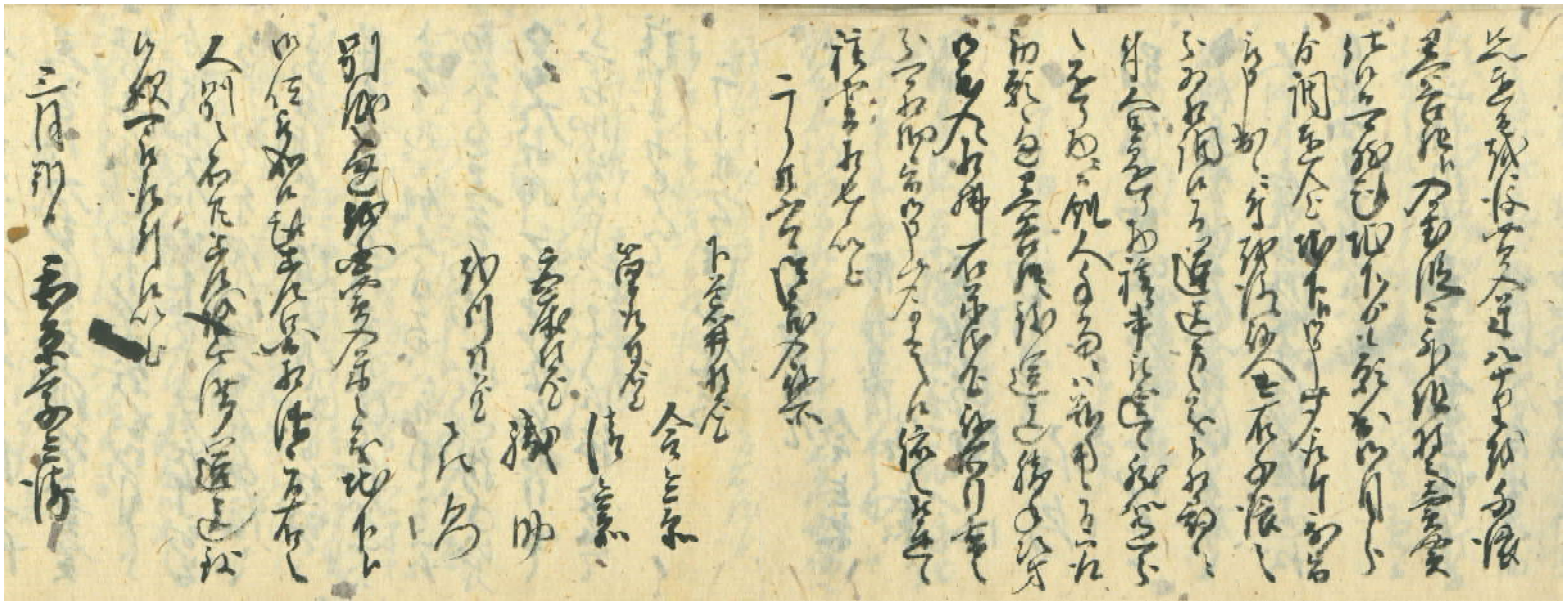
③南山御蔵入は高冷地のため以前から、米の生産高は極めて低い地域であったので、この冷夏の影響は甚大であったと考えられる。

④会津藩の正史「家世実紀」(かせじっき)天明4年(1784)1月15日の記述には、この時点での南山御蔵入の餓死者は2432人とある。

⑤この当時、南山御蔵入を江戸幕府に代わって統治を代行していた会津藩は、救援米を越後国から救援米を運ぶことを決めた。

⑥しかし、当時の八十里越は険しく道が細かったため、牛や馬を用いた米の輸送はできなかった。このため南山御蔵入の民衆は、八十里越の改修を強く願った。

右は、天明の飢饉の際、南山御蔵入を代行統治していた会津藩の役人が、村役人に出した文書である。



先達而越後買入米八十里越千俵
黒谷組江入置段々外組村々へ売買
仕候而可然趣地下ヨリも願出御用分
ヨリ調達金地下江御申聞取斗度旨
被申出候ニ付、越後役人遣右千俵之
分為相調候間運送方之義被相尋候ニ
付人足懸り物種々書被送候、然処過分
之懸り物ニ而飢人手当ニ六難用候間、最
初願之通黒谷組へ致運送、勝手次第
御蔵入へ相拂石米代金役所引替之
分可相納候旨御申聞可有之候、依之被
達候、
積書相出候、以上、
二月廿六日　御蔵入役所

下荒井村名主
金兵衛
簗取村名主
清兵衛
宮床村名主
織助
越川村名主
喜右衛門

別紙之通越国買入米之義地下江
御供被成候趣差図相話候間、右之
人別之者共差越無滞運送致
候様可被取計候、以上、
三月朔日　宮原学兵衛

出典：天明四年（一七八四）「御用状并御下知留状」
大沼郡金山町山入　大竹文書　金山町教育委員会所蔵

要約
①先日、越後から買い入れた米（八十里越えのルートで運ぶ分）1,000俵について、黒谷組（只見町）に運び入れて保管し、そこから周囲の他の組の村々へ順次売買するのがよいという願い出が地元からあった。
②また、御用分（公的な必要分）の調達金についても、地元へよく言い含めて取り計らってほしいとの申し出があった。
③これを受けて越後へ（会津藩の）役人を派遣し、その1000俵を調達する手配を整えた。
④そのうえで、現地へ「（八十里越の）運送方法はどうするのか」と問い合わせたところ、人足や諸経費に関する様々な見積書が送られてきた。
⑤しかし、その見積もりを見ると諸経費があまりにも高額（過分の懸り物）であり、これでは（本来の目的である）飢饉の救済米（飢人手当）としては費用がかかりすぎである。
⑥そのため、最初の願い出の通りに黒谷組へ運送させ、地元の判断（勝手次第）で御蔵入へ払い下げ、米の代金と役所で引き換えた分を（しかるべき場所へ）納めさせるよう、地元へ申し渡すようにした。
⑦この方針に決定したので通知する。そして、あらたな、見積書を提出するように。
⑧別紙の通り、越後国（現在の新潟県）から買い入れる米について、現地の領民（地下）へ供給するようにとの指示が下された。
⑨ついて、該当する人別（担当の者たち）を現地へ派遣し、滞りなく運送が行われるよう取り計うように。

7　『八十里越新道記』第2部から見る平岡文次郎の動静　その①

和暦(西暦)	動	静
天保8年 (1837)	●江戸幕府は、8月南山御蔵入の代官として平岡文次郎(以下、平岡と記す)を派遣。 平岡は、同時に越後脇野町(新潟県長岡市脇野町)御蔵入の代官も兼任した。	
天保10年 (1839)	●平岡は、民衆から八十里越改修についての願書が出ていたことから、八十里越の状況を検分した。 ●この頃平岡は、南山御蔵入と越後水原(新潟県阿賀野市)御蔵入の代官も勤めていた(「天保十年県令集覧」『江戸幕府代官史料』)。	
(年次不明)	●平岡は家来の秋葉篤太夫に指示をして、村松藩領分の八十里越改修についての交渉をさせた。	
天保11年 (1840)	●8月、村松藩士の菊池・熊倉様と村松藩領の村役人や人足30人ほどが八十里越改修のための検分や協議のため叶津村に来て1泊して帰った。	

『八十里越新道記』第2部から見る平岡文次郎の動静　その②

和暦(西暦)	動	静
天保12年 (1841)	●7月、平岡は、南山御蔵入田島代官所の大島理惣治・武井正三郎、黒鍬頭(土木技術者棟梁)源重に指示し、八十里越改修のための人足の見積等をさせた。当初道幅は9尺(約272cm)で計画した。 ●この時、南山御蔵入古町組鴇巣村(南会津郡南会津町鴇巣)名主・近右衛門、和泉田組下山村(同郡同町下山)名主・順助(「八十里越新道記」を編さんした馬場順平の息子)が同行した。	
天保13年 (1842)	●平岡は、御蔵入を管轄する勘定奉行に対し、八十里越改修の要望書を提出。 ●平岡は、南山御蔵入代官を退任し、武蔵国(東京都、埼玉県、神奈川県の一部)と下総国(しもうさのくに　千葉県北部、茨城県南西部、埼玉県東部、東京都江戸川区・葛飾区の一部)にある御蔵入の代官に着任した(天保十四年県令集覧」『江戸幕府代官史料』)。南山御蔵入代官は、小笠原信助が着任した。この時、小笠原は越後水原の代官も兼任(前掲書)。	

『八十里越新道記』第2部から見る平岡文次郎の動静　その③

和暦(西暦)	動	静
天保14年 (1843)	●7月、平岡は、「奥州南山八十里越切開取計方伺書」を江戸幕府で御蔵入を管轄する勘定所に提出。 ●ここで、平岡は八十里越の道幅を当初は9尺に見積もったが、牛馬運送が円滑に行われるよう2間(約362cm)にすること。 ●村松藩領分の改修費用は村松藩が負担すること。 ●南山御蔵入・魚沼御蔵入分の改修費用は、越後水原の豪農・佐藤友右衛門が1000両、小嶌次郎吉が200両合計1200両(約1億五千万円)の寄附金でまかなうと記している。 ●これは、平岡が越後水原代官を兼任していた時、八十里越改修によって、牛馬運送が出来るようになた場合のメリットを「水原13人衆」といわれる豪農達に訴え、2人が応じたと考えられる。 ●江戸幕府は新発田藩領であった福島潟(新潟県阿賀野市)を御蔵入にして干拓を実施。これによって広大な水田が出現した。この水田の耕作権を有した豪農が「水原13人衆」と呼ばれている(参考文献:『水原編年史』)。	

『八十里越新道記』第2部から見る平岡文次郎の動静　その④

和暦(西暦)	動　静
天保14年 (1843)	●村松藩領では、5月から八十里越改修工事が始まった。 ●7月25日、平岡は八十里越改修工事の責任者として家来17人を伴って江戸を出発。8月1日田島着。 ●平岡は、田島の宿泊先に南山御蔵入惣代名主の長野村(南会津郡南会津町長野)名主・金左衛門、鴇巣村名主・近右衛門、下山村名主・順助を呼び八十里越改修についての状況や段取りについて意見を聞いた。 ●そして平岡は、近右衛門と順助に同行するように命じた。 ●同月4日針生村(南会津郡南会津町針生)泊、5日下山村泊、10日入叶津(南会津郡只見町入叶津)泊。11日から平岡は八十里越改修工事を検分。 ●13日平岡は検分を進め、村松藩領吉ヶ平村(新潟県三条市)に到着。 ●平岡は8月26日までに八十里越改修工事の検分を終了。28日山口村(南会津郡南会津町山口)泊。 ●29日入小屋村(南会津郡南会津町東)駒戸峠を越し、針生村から古檜峠(ここに、「八十里みち」と刻された道標がある)を通りに江戸に帰った。

8　「水原13人衆」と福島潟干拓



手前が福島潟。奥に広がる広大な農地は、福島潟を干拓し出現した。その耕作権を有する豪農が「水原13人衆」と呼ばれる。工事費を寄付した佐藤友右衛門、小嶌治郎吉はそこに数えられる

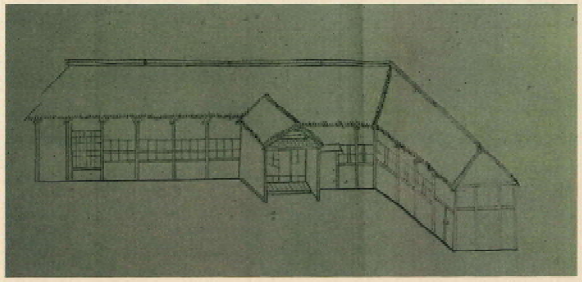
平岡文次郎関係先位置図



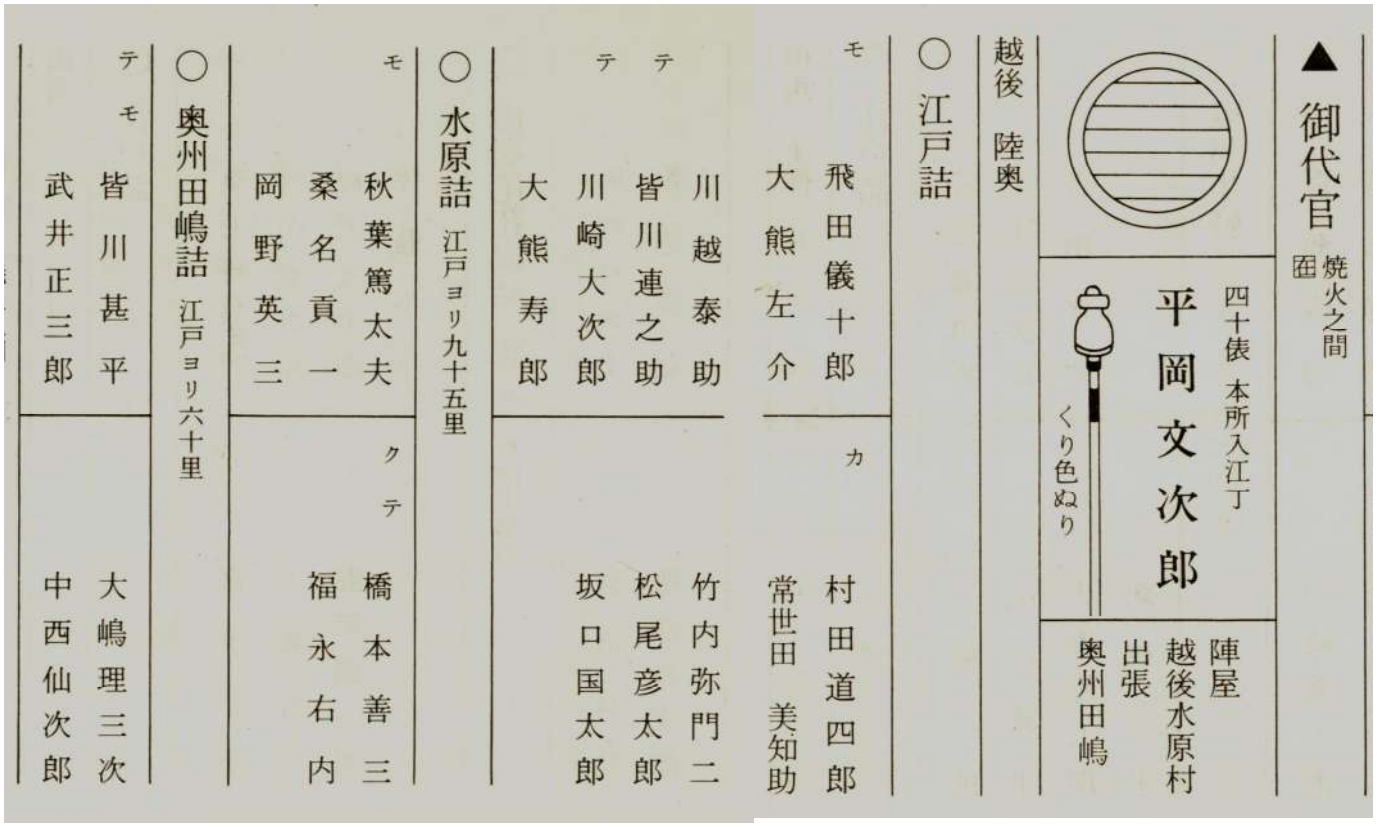
平岡文次郎が代官を勤めた水原代官所(復元)
新潟県阿賀野市



福島潟と干拓地の水田(新潟市北区地内)
江戸幕府は、新発田藩領であった福島潟を直轄地にして干拓。これによって広大な水田が出現。この支配は水原代官所が行った。この水田の耕作権を有した豪農「水原 13 人衆」の内、佐藤友右衛門(1000 両)、小嶌次郎吉(200 両)が八十里越改修費を寄付した(参考文献:『水原編年史』)。
平岡文次郎は水原代官時代に佐藤と小嶌とは良好な関係を築いていたと考えられる。

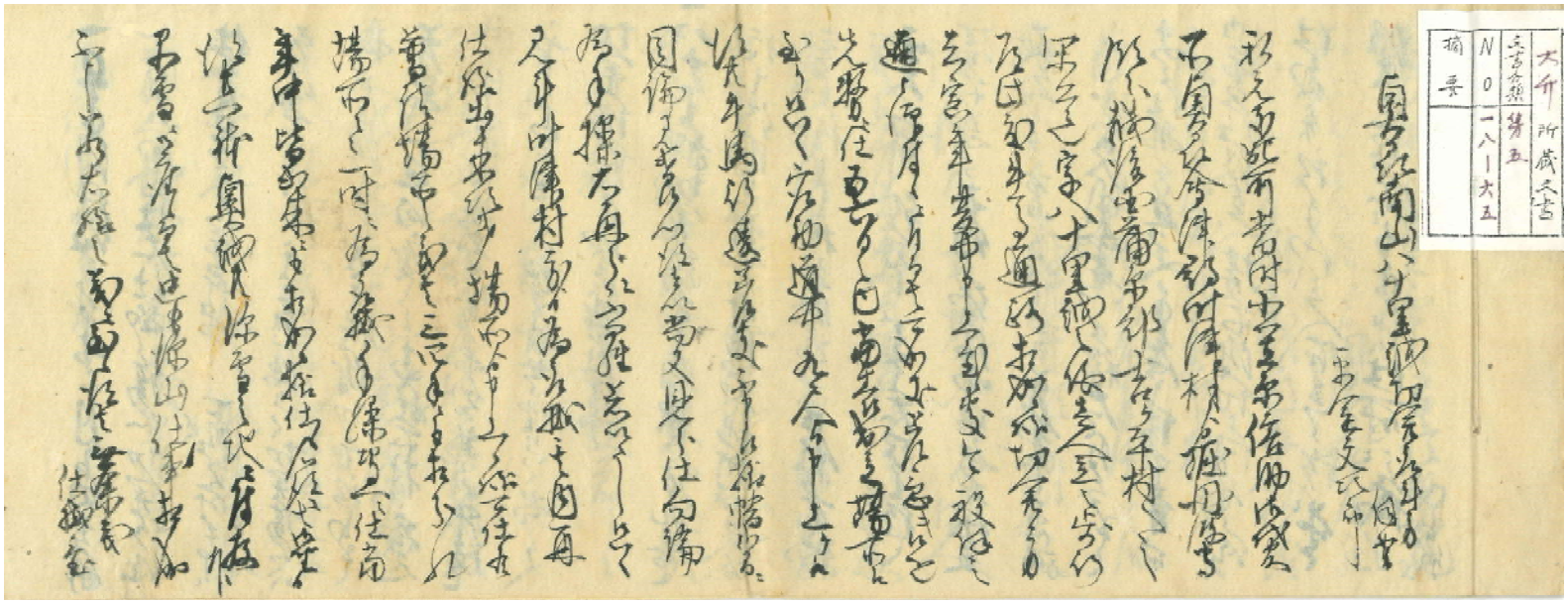


平岡文次郎が代官を勤めた南山御蔵入田島代官所
福島県庁文書



天保10年(1839)『県令集覧』『江戸幕府代官史料』

9　平岡文次郎、幕府に八十里越改修を願い出る



奥州南山八十里越切開取計方

伺書

平岡文次郎

私元支配所、当時小笠原信助御代官
所奥州会津郡叶津村ゟ堀丹波守
領分越後国蒲原郡吉ヶ平へ之
閑道字八十里越之義、壱人立之歩行
道此度牛馬通路相成候様切開方
去寅年夏中申上置候処、今般伺之
通被仰付候ニ付而者可成丈差急キ候を
先務ニ仕、五・六日之内当表出立、場所江
至り候八ハ、最初道中九尺と申上ヶ候
得共、牛馬行違差支不申候様、幅弐間ニ
目論見替候心得を以尚又見分仕、勿論
為手操右再分仕、不羅着いたし候八ハ、
見計叶津村方ゟ為取掛、其内再
仕様出来次第、場所ゟ申上候様可仕候、
普請場所之義者、三、四手ニも相分れ
場所々ニ一時ニ為取掛手繰専一ニ仕、当
年中皆出来ニも相成候様仕候心得ニ者御座候
得共一躰奥越共深雪之地ニ付存外
早雪ニ御座候而者迚も深山仕事相成
不申若右様之義ニ至候得者無余義
仕掛置

出典：大沼郡金山町山入　大竹家文書　金山町教育委員会所蔵

要約

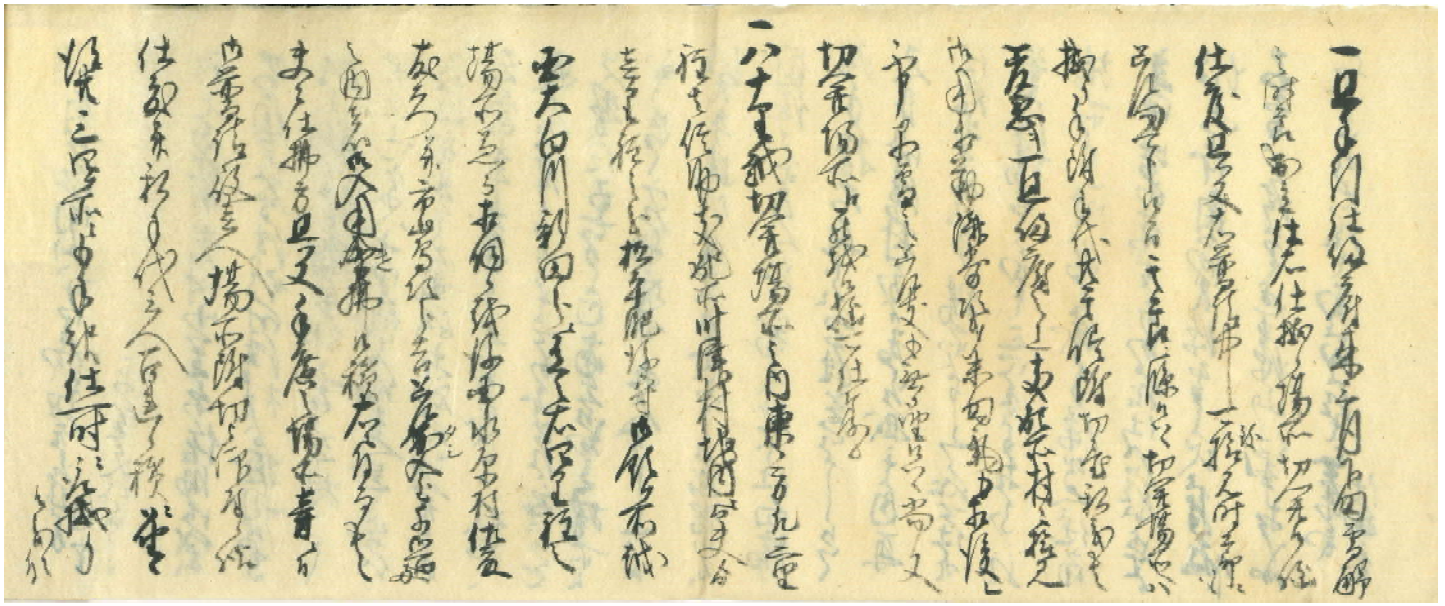
①私が以前に支配していた場所で、現在は小笠原信助殿が御代官を務めている、奥州会津郡の叶津村から、堀丹波守殿（村松藩）の領地である越後国蒲原郡の吉ヶ平村へと至る「八十里越」と呼ばれる寂れた山道について報告したい。

②この道は、人間が1人やっと通れるほどの道である。牛や馬が通行できるように切り開く（拡張する）件について、去る寅年（天保13年▪1842）の夏に（計画を）提出した。

③このたび、その伺（申請）の通りに工事を行うよう御指図を得た。何よりもまずは、できる限り急いで着手することを最優先とする。あと5～6日のうちにこちら（江戸）を出発する。

④当初は道の幅を「9尺（約2.7メートル）」としていたが、牛や馬がスムーズにすれ違えるように、幅を「2間（約3.6メートル）」に見積もり直す方針で、もう一度現地を調査する。

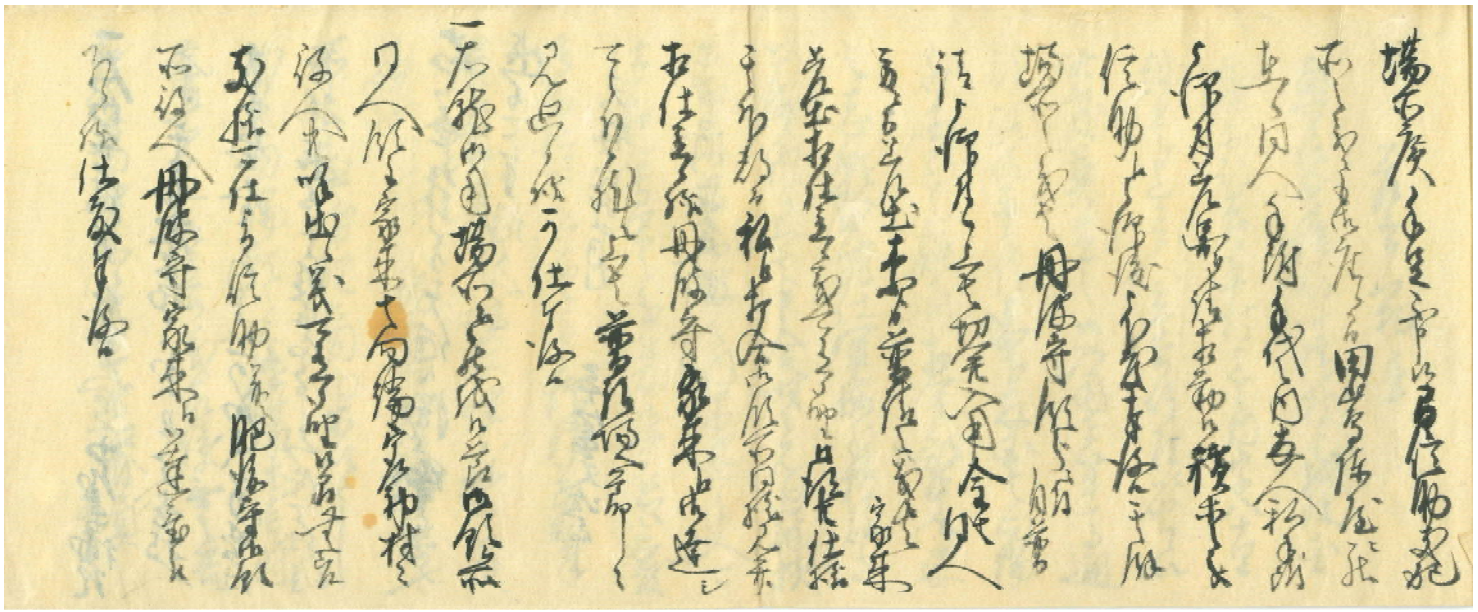
⑤もちろん、人手を集めて（工事の）詳細な再見積もりを行い、抜かりなく準備が整ったら、
まずは会津側の叶津村の方から着工させる。
⑥その間に、全体の再仕様書（詳しい工事計画書）が出来上がり次第、現地から（江戸へ）
報告を申し上げる予定である。
⑦普請（工事）を行う場所は、3～4つの工区に人員を分散させ、それぞれの場所で同時に
一斉に着工（突貫工事）させることが最も肝要であると考えている。
⑧なんとか今年（シーズン中）のうちにすべて完成させたいという心積もりでいるが、
この奥州▪越後の境界は大変な豪雪地帯である。
⑨もし予想以上に早く雪が降ると、このような深い山奥での工事は到底不可能になる。
⑩万が一、早期の降雪の場合は、やむを得ず、その時点で一旦工事を中断（仕掛け置き）と
する。



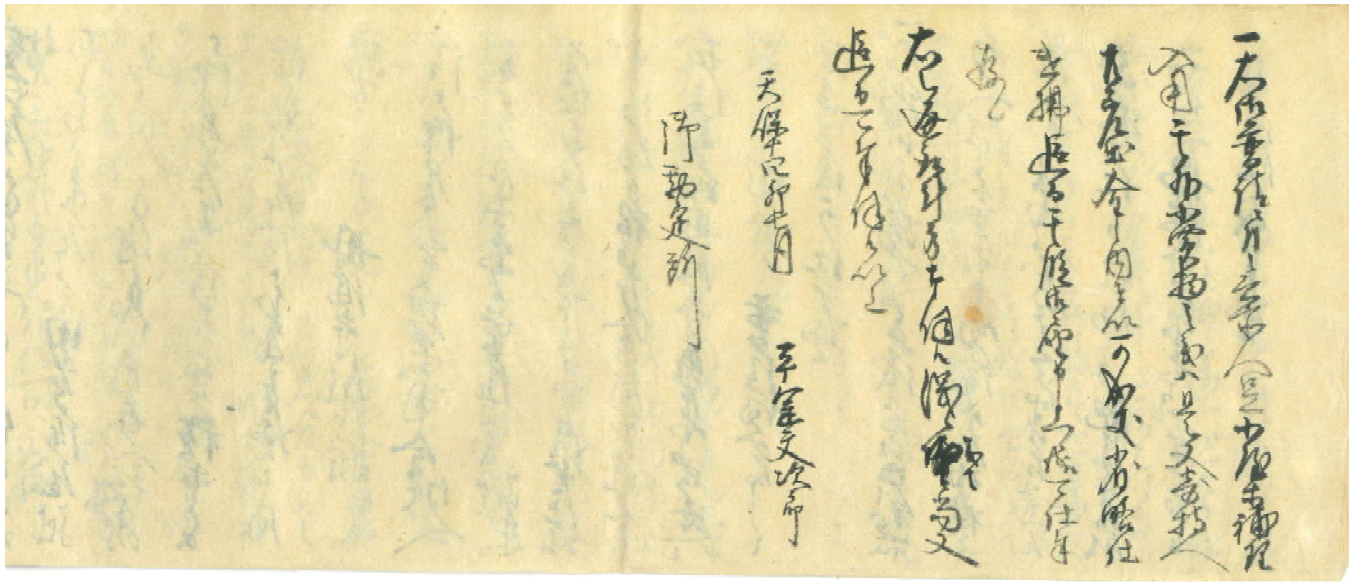
一旦手引仕帰府来三月下旬雪解
之時節出立仕右仕り場所切開候様
仕度、且又右普請中可致検見時節ニも
差向可申候間、其節餘候ハハ切開場所へハ
掛り手附、手代共其侭附切置、私義者
差急キ一旦帰府之上、支配所村々検見
御用相勤済寄次第未旬気も相後レ
不申早雪之差支も無御座候ハハ尚又
切開場所江罷越候様可仕奉存候、
一八十里越切開場所之内、東ノ方凡三里
程者信助支配所叶津村地内ニ而、夫ヨリ
壱里程之義、松平肥後守御預ケ所、越
国大白川新田分ニ有之右四里程之
場所兼而相伺候相伺候越後国水原村佐藤
友右衛門并市嶌次郎吉差出金千弐百両
之内を以、御入用遣拂候積、右ニ付而者
夫々仕拂方且ツ又手廣之場所傍ニ而
御普請役壱人場所附切被仰付候様
仕度并私手代三人召連候積ニ御座候
得共三四ケ所ニも手訳仕一時ニ取掛り
候義ニ付

⑪段取りをつけて任地へ戻り、来年の3月下旬の雪解けの時期に再出発して、
　現地の改修工事に取り掛かりたいと考えている。
⑫また、この工事の期間中に、私の任地の「検見（年貢の収穫量調査）」の時期が重なる
　見込みである。
⑬もしその際、工事の進捗に余裕があれば、現場には担当の手附（下級役人）や手代
　（自分の部下）をそのまま常駐させて監督させ、私自身は急ぎ一旦任地に帰る。
⑭そして任地の検見の御用を勤め上げ、それが終わり次第、まだ時期が遅くならず、
　早い降雪の支障もなければ、改修工事の現場へ赴きたいと考えている。
⑮八十里越の改修工事を計画している場所のうち、東側の約3里（約12ｋｍ）ほどは、
　（小笠原）信助の支配所である「叶津村（福島県只見町叶津）」の領内である。
⑯そこから先の1里（約4ｋｍ）ほどは、松平肥後守（会津藩主）の御預け地である越後国
　「大白川新田（新潟県魚沼市大白川）」の領内にあたる。

⑰この合わせて4里（約16ｋｍ）ほどの場所の工事費用については、越後国水原村の豪商・
　佐藤友右衛門と、市嶌次郎吉が差し出す寄付1,200両の中から経費を支払う計画である。
⑱これに伴い、それぞれの金銭の支払い方や、また工事エリアが広範囲に及ぶため、
　現場のすぐ近くに「御普請役（工事監督官）」を1人、専任で任命していただきたい。
⑲私の方でも手代を3人連れて行く予定であるが、3～4箇所の現場に手分けして同時に
　一斉に取り掛かる必要があるため……（以下、人員増員などの要求へ続く）



場所廣手足不申候間、信助支配
所之義ニも御座候間、田嶌陣屋ニ罷
在候同人手附手代之内両人私手附
被仰付差図も請相勤候積等之義
信助江被仰渡被下度奉存候、其餘
場所之義者、丹波守領分ニ付自普
請被仰付候上者、切開入用金者同人
方ニ而差出、素ゟ普請之義者家来
差出相仕立候義可有御座候得共、仕様
其外都而私江打合、御領所同様見弁
相仕立候様丹波守家来江御達シ
可被下候、然上者普請場へ節々
見廻候様可仕奉存候、
一右就御用場所江罷越候節、御預ヶ所
同人領主家来者勿論、最初村々
役人共呼出候義可有御座候間無差
支様可仕旨、信助并肥後守御預
所役人、丹波守家来江御達置被
下候様仕度奉存候



一右御普請ニ付会所人足小屋捕理
入用、其外小買物之義ハ、是又奇特人
共差出金之内を以可成丈省略仕
遣拂追而其段御座申上候様可仕奉
存候、
右之通取計方奉伺候儀候義者尚又
追而可奉伺候、以上、

天保十四卯七月　平岡文次郎

御勘定所

⑳改修工事現場が広く、私の手下の人員だけでは人手が足りない。
㉑この地域は信助が支配している場所でもある。
㉒そのため、田島陣屋に勤務している信助の部下（手附や手代）のうち2人を、私の部下として配属するよう命じてもらいたい。
㉓彼らに私の指示を受けて勤務させるように、信助へ命令いただきたい。
㉔そのほかの改修工事現場については、堀丹波守の領分（村松藩）である。
㉕自普請（領主自身が費用を出して行う工事）を命じられた以上、改修工事にかかる費用は堀丹波守が支出することになる。
㉖もともと工事自体は堀丹波守の家来たちを派遣して執り行うべきものであるが、設計や見積もり（仕様）など、すべて私と事前に打ち合わせをさせ、幕府の直轄領（御領所）と同じように見分（調査・監督）して進めるよう、丹波守の家来へお達し（通達）をいただきたい。

㉗そのようになれば、私も改修工事現場へ度々見回りに行こうと考えている。
㉘この御用（公務）のために現地へ赴く際、その土地の領主（信助や丹波守など）の家来はもちろん、現地の村々の役人を呼び出すこともあるかと思う。
㉙その際に支障がないよう、あらかじめスムーズに対応せよという旨を、信助、肥後守の預かり所の役人、そして丹波守の家来たちへ事前に連絡しておいていただきたい。
㉚改修工事にあたり、会所の人足小屋を建てる費用や、その他細々とした買い物の費用については、寄付者たちが差し出した寄付金の中から、できる限り節約して支払いを済ませる。
㉛その詳細（決算）については、追って内容を報告する。
㉜右の通りの取り計らい方についてお伺い（承認の要請）する。
㉝この件に関する詳細な手続き等については、なおまた追ってお伺いする。以上。

天保14年　卯7月　　平岡文次郎

御勘定所（宛）

10　『八十里越新道記』第2部から見る改修工事

概要

●改修工事の責任者＝平岡文次郎

●改修工事の期間天保14年(1843)8月～9月

●改修工事の延長＝約26.2km

内訳

・南山御蔵入叶津村区間＝約12.7km

・魚沼郡御蔵入大白川新田村区間＝約2.4km

・蒲原郡村松藩吉ヶ平村区間＝約11.1km

●改修工事に携わった累計人数

・叶津村区間＝2万3632人

・大白川新田村区間＝7688人

・吉ヶ平村区間＝記載なし

●改修工事費用＝1200両(約1億5000万円)

工事費は、越後水原(新潟県阿賀野市)の水原13人衆の佐藤友右衛門(1000両)と小嶌次郎吉(200両)からの寄附である。

●村松藩吉ヶ平村区間の工事費は、村松藩が負担した。

●天保14年(1843)八十里越改修工事のおおまかな流れ　その①

月・日（新暦）	事項
5月1日(5月29日)	村松藩領地内の工事開始。
7月25日(8月20)	八十里越改修工事の責任者に任命された平岡文次郎(以下、平岡と記す)は江戸を出発。
8月1日(8月25日)	平岡、田島着。
8月4日(8月28日)	土木技術者ら合計80人が下山村(南会津郡南会津町下山)に宿泊。
8月6日(8月30日)	平岡叶津村着。
8月7日(8月31日)	八十里越改修工事開始。
8月11日(9月4日)	平岡は、大三尾小屋を拠点として改修工事を検分。
8月13日(9月6日)	平岡は、村松藩領地内を検分。

●天保14年(1843)八十里越改修工事のおおまかな流れ　その②

8月15日(9月8日)	平岡は、越後国魚沼郡御蔵入大白川村地内の改修工事を検分。
8月29日(9月22日)	平岡は、当時武蔵・下総国内の御蔵入代官を勤めていた。平岡は、任地の年貢徴収の時期になったため、駒戸峠→古檜峠を通り江戸に帰った。 平岡は、残りの検分を南山御蔵入代官・小笠原信助に命じた。
9月22日(10月15日)	八十里越改修工事が完成した。長野村(南会津郡南会津町長野)の久蔵と加兵衛は、馬1頭に塩5斗5升(約82.5kg)をつけ、10頭をつなげて運んだ。ここに、平岡の尽力によって、民衆が長年待ち望んだ八十里越の牛馬輸送が可能になった。

●『八十里越新道記』には、土木技術者達の名前が記されている。

●土木技術者の「頭」(棟梁)

▪栄蔵　越後長沢組原村(三条市)生まれ。当時は栗橋村(埼玉県久喜市栗橋)在住

▪基重　田島(南会津郡南会津町田島)生まれ。当時は大田原(栃木県大田原市)在住

●測量等の技術者

▪縄張(縄を張って、改修道の区画決定等を行う)「御仲間役人衆中」

▪量盤(りょうばん、測量の技術者)月岡才助※1

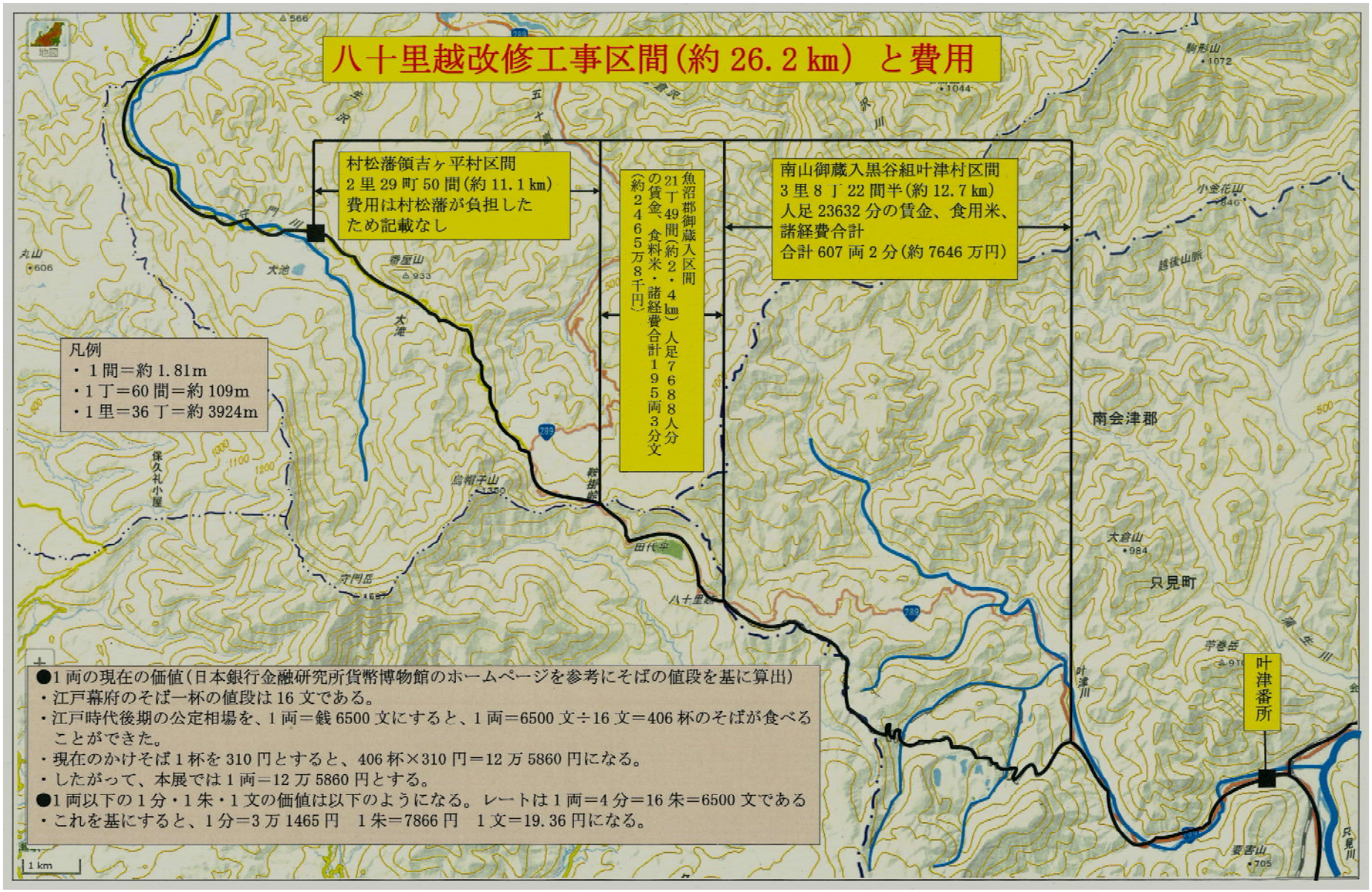
▪磁石(磁石を用い、改修道の方向を決定)大橋道一郎

▪帳記(記録係)梶山鉄六▪佐藤鉄蔵※2

※1　月岡才助は、平岡文次郎の家来。平岡が武蔵▪下総国の御蔵入の代官を勤めていた時、江戸で勤務していた(「天保十四年　県令集覧」『江戸幕府代官史料』)。

※2　佐藤鉄蔵は、小笠原信助の家来。小笠原が越後水原と南山御蔵入の代官を兼任していた時、田島で勤務していた(「天保十四年　県令集覧」『江戸幕府代官史料』)。


「八十里越新道記」にある作業小屋位置図
小屋の位置は以下の文書を参考に展示者が推定した。
平成 10 年(1998) 11 月　新国　勇氏作成「八十里古道」(只見町叶津中ノ平　吉田貞夫氏への聞き取り調査に基づく)
八十里越(国道 289 号) ―記録が語る歴史の道―　編集委員会『八十里越』1996 年　北陸建設弘済会
・八十里越改修工事に従事する人々は、これらの作業小屋に宿泊しながら工事を進めた。
・大三尾小屋には、平岡文次郎も宿泊しながら、改修工事の検分を行った。
・大三尾小屋は、長 13 間半(約 24m)
横 2 間半(約 4.5m)
台所付
工事費＝18 両(225 万円
・権左衛門清水小屋・宮戸小屋は、長 5 間(約 9m)
横 2 間半(約 4.5m)
工事費は共に 5 両(62 万 5 千円)
・小屋建設は只見村の人が請け負った。
・村松藩地内の小屋の大きさ、工事費等の記述はない。
吉ヶ平村
番屋小屋
御所ノ平空堀小屋
鞍掛小屋
守門川
越後国蒲原郡村松藩領
吉ヶ平村地内(三条市)
陸奥国会津郡南山御蔵入
黒谷組叶津村地内
(南会津郡只見町叶津)
宮戸小屋
田代小屋
越後国魚沼郡御蔵入大白川新田村地内
(新潟県魚沼市大白川)
大三本沢
叶津川
小三本沢
叶津番所
只見町
大三尾小屋
権左衛門清水小屋
1 km


八十里越改修工事区間（約 26.2 ㎞）と費用
村松藩領吉ヶ平村区間
2 里 29 町 50 間（約 11.1 ㎞）
費用は村松藩が負担した
ため記載なし
魚沼郡御蔵入区間
21 丁 49 間（約 2・4 ㎞）人足 7688 人分
の賃金、食料米・諸経費合計 195 両 3 分文
（約 2465 万 8 千円）
南山御蔵入黒谷組叶津村区間
3 里 8 丁 22 間半（約 12.7 ㎞）
人足 23632 分の賃金、食用米、
諸経費合計
合計 607 両 2 分（約 7646 万円）
凡例
・1 間＝約 1.81m
・1 丁＝60 間＝約 109m
・1 里＝36 丁＝約 3924m
南会津郡
只見町
叶津番所
●1 両の現在の価値（日本銀行金融研究所貨幣博物館のホームページを参考にそばの値段を基に算出）
・江戸幕府のそば一杯の値段は 16 文である。
・江戸時代後期の公定相場を、1 両＝銭 6500 文にすると、1 両＝6500 文÷16 文＝406 杯のそばが食べることができた。
・現在のかけそば 1 杯を 310 円とすると、406 杯×310 円＝12 万 5860 円になる。
・したがって、本展では 1 両＝12 万 5860 円とする。
●1 両以下の 1 分・1 朱・1 文の価値は以下のようになる。レートは 1 両＝4 分＝16 朱＝6500 文である
・これを基にすると、1 分＝3 万 1465 円　1 朱＝7866 円　1 文＝19.36 円になる。
1 km

11　『八十里越新道記』第3部　裏八十里越改修の動き

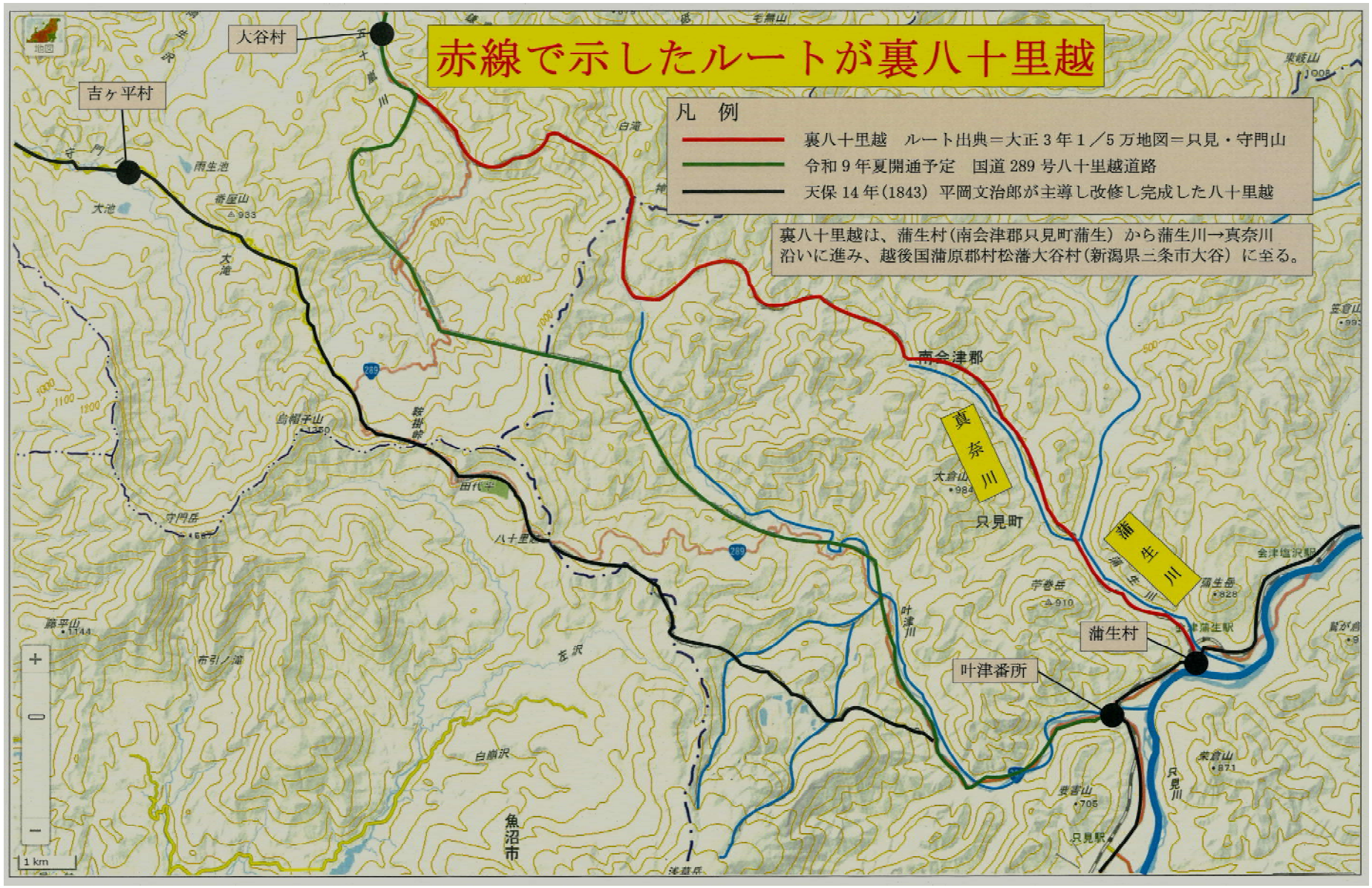
①第3部は、裏八十里越と称される、蒲生村（南会津郡只見町蒲生）から蒲生川の支流・真奈川沿いを進み、越後村松藩大谷村（新潟県三条市大谷）至る道の改修を求める文書の写しが掲載されている。

②第3部の冒頭には、

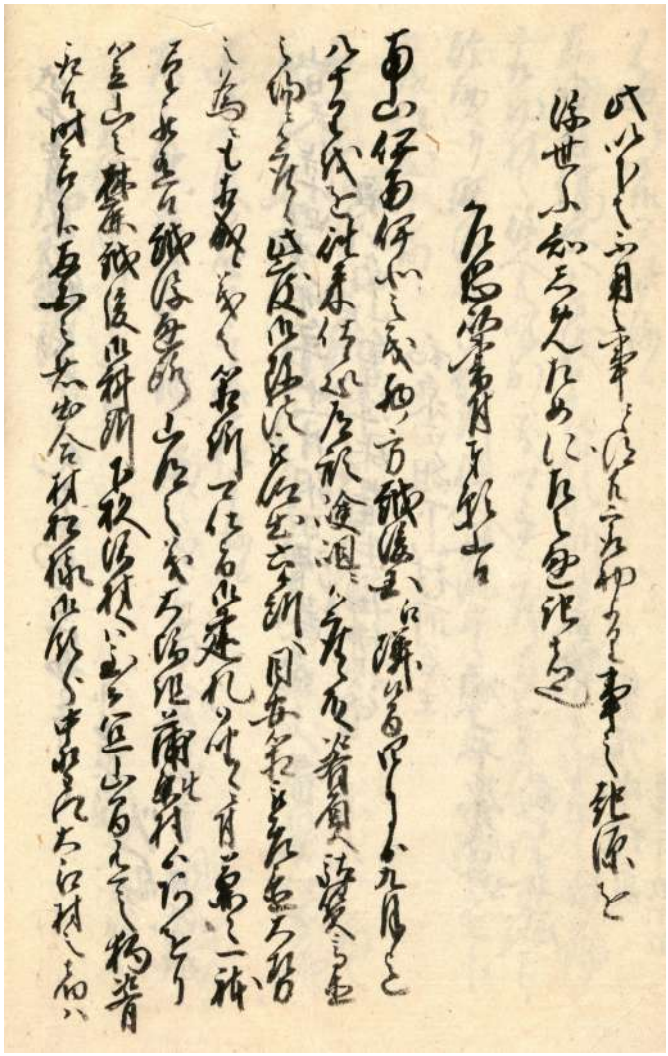
　　此以下は不用之事ニ候得共、最初より事之起源を浮世に知しめんために、左之通記者也

とある。

③これは、民衆が陸奥国南山御蔵入と越後国蒲原郡村松藩を結ぶ道について、最初は八十里越よりも裏八十里越の改修を支配者に求めたことを、後生に伝えたいという編さん者の意図を読み取ることができる。


赤線で示したルートが裏八十里越
凡　例
裏八十里越　ルート出典＝大正３年１／５万地図＝只見・守門山
令和９年夏開通予定　国道 289 号八十里越道路
天保 14 年(1843) 平岡文治郎が主導し改修し完成した八十里越
裏八十里越は、蒲生村(南会津郡只見町蒲生) から蒲生川→真奈川
沿いに進み、越後国蒲原郡村松藩大谷村(新潟県三条市大谷) に至る。
大谷村
吉ヶ平村
南会津郡
只見町
蒲生村
叶津番所
真奈川
蒲生川
叶津川
魚沼市
只見川
只見駅
守門岳
烏帽子山
八十里越
布引ノ滝
白崩沢
長沢
大倉山
荒倉山
毛無山
東岐山
1 km

『八十里新道記』第三部（渡部雅俊氏伝世本）



此以下者不用之事ニ候得共、最初より事之起源を
浮世に知しめために左之通記者也、

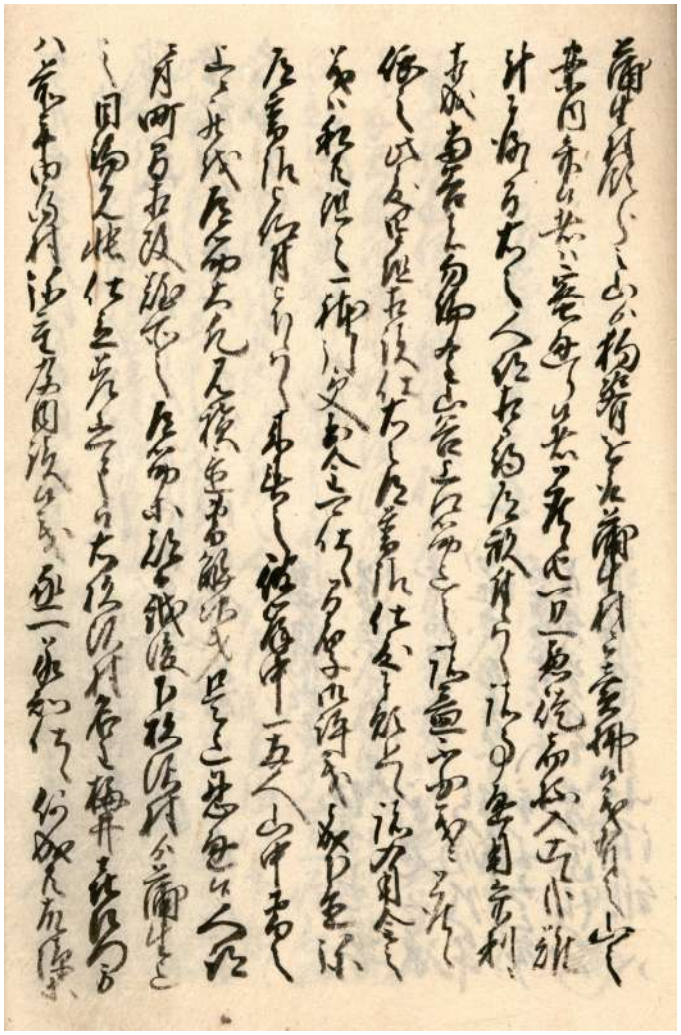
乍恐以書付奉願上候

南山伊南伊北之義、西ノ方越後国江隣候間、四月ゟ九月迄
八十里越を往来仕候処、道形険阻ニ御座候故背負駄賃高直
之場ニ御座候、此度御改法被仰出六ヶ所へ目安箱被差置大勢
之為ニも相成候義者箱訴可仕旨御建札御座候ニ付、兼々一躰
届罷有候、越後通路山道之義、大塩組蒲生村ゟあとり
笠山之麓、越後御料所下杁沢村へハ至而宜山間有之、狗背
取候時節者両国之者出合、村松様御領分中野郷大江村之者ハ

この以下のことは（本来なら）申し立てる必要のないことでございますが、最初からの事の起こりを世間（御公儀）に知っていただくために、左（下記）の通り記すものであります。

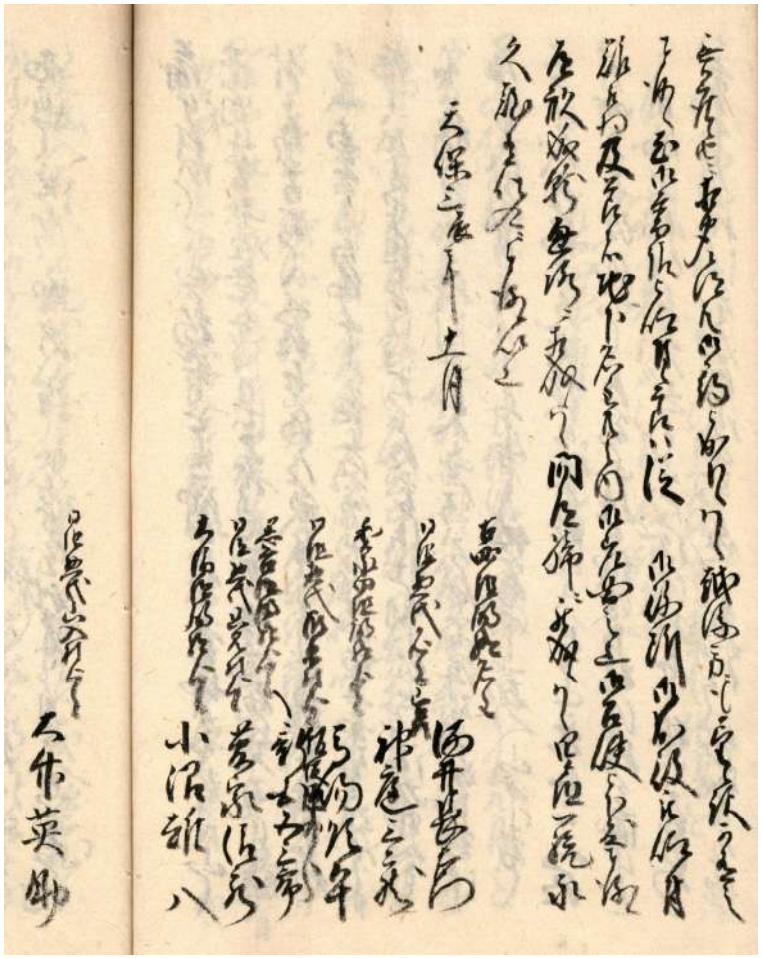
恐れながら書付（願書）を以て願い上げ奉り候。

南山伊南・伊北（地方）の件、西の方は越後国（新潟県）に隣接しております。そのため、四月から九月までは「八十里越」を往来しておりましたが、道が非常に険しいため、荷物を背負って運ぶ駄賃（輸送費）が高くつく場所でございます。この度、御改法（統治制度の改革）が仰せ出され、六ヶ所に目安箱が設置されました。「大勢（領民全体）のためになることであれば、箱訴（目安箱への直訴）をしてよい」との御高札（お触れ）が出ましたので、かねてより一同で困り果てていた、越後へ通じる山道の件について（申し上げます）。大塩組の蒲生村（現在の只見町蒲生）から、「あとり笠山」の麓を経て、越後の幕府領である下杉沢村（現在の新潟県魚沼市）へ至る、非常に都合の良い山間（ルート）がございます。犬背（ゼンマイなどの山菜）を採取する時期には両国の者がそこで出会っており、村松藩領中野郷の大江村の者などは……



蒲生村分之山ゟ狗背を取、蒲生村ニ而売拂候義有之、山之
案内弁候者ハ、密通り候者御座候由、万一悪徒者抔入込候哉難
計ニ存候間、右之人跡相尋道形付候ハハ諸事通用弁利ニ
相成、当谷者勿論、金山谷、上郷筋迄之諸益不少義ニ御座候、
依之此度四ヶ組相談仕、右道普請仕度奉願上候、諸入用金之
義ハ、私共組々一躰引受、出金可仕候間、厚御評義被成下置、弥
道普請被仰付被下候ハハ、来春之彼岸中一両人山中雪之
上ニ罷越道筋大凡見積置、雪解次第是迄忍通候人跡
ニ付、町間相改難所之道筋等都而越後下杁沢村ゟ蒲生迄
之目論見帳仕立差上可申候、右杁沢村名主梅井喜左衛門方
ハ前年田島村弥重及内談候義逐一承知仕候何成共故障等

蒲生村の山から「狗背」(ぜんまい)を採り、蒲生村で売り払う者がおります。山の案内に詳しい者は、秘密裏に(密通り)山を行き来しているとのことです。しかし、万が一にも悪党などが紛れ込んではいけないと、大変懸念しております。そこで、この(隠れた)人々の足跡を正式に尋ねて調査し、ちゃんとした道として整備すれば、諸々の往来や流通が非常に便利になります。当谷はもちろんのこと、金山谷(かねやまだに)や上郷筋(かみごうすじ・南会津郡南会津町周辺)に至るまで、多くの地域にとって計り知れない利益となります。そのため、このたび金山谷四ヶ組(野尻組・大谷組・大石組・滝谷組＝大沼郡昭和村・金山町・三島町・河沼郡柳津町の一部)で相談いたしまして、この道普請(道路建設工事)を行いたくお願い申し上げます。工事に必要な諸費用につきましては、私どもの組々が一体となってすべて引き受け、出金いたします。どうか深いご評議(ご検討)をいただき、いよいよ道普請をお申し付け(許可)いただけますならば、来年の春の彼岸中に、一～二名が山中の雪の上に赴いて、ルートの大凡の見積もりを立てておきます。そして雪解けを待って、これまで人々が忍んで通っていた足跡に従って距離(町間)を改め、難所の手入れ方法など、越後の下杉沢村から蒲生村に至るまでの「目論見帳(計画書・予算書)」を仕立てて差し上げます。なお、右の杉沢村の名主である梅井喜左衛門方は、前年に田島村の弥重が内談(内々の相談)した内容を逐一承知しており、何ら故障(反対や支障)などは……



無御座候由ニ相聞候得共、御尋被成下候ハハ、越後方ニも望候訳可有之奉存候、尤御普請被仰付候節ハ従　御役所御出役被仰付難被為及節者、地下名主共之内、御差図之上御召使被下度奉存候、道形成就通行ニ相成候ハハ、間道締ニ罷成候ハハ、四ヶ組一統永久難有仕合ニ奉存候、以上、

天保三辰年十一月

古町組觸継名主
　酒井長衛門
同組惣代名主山口村
　神庭三蔵
和泉田組觸継名主
　馬場順平（『八十里越新道記』編者）
同組惣代瀧原村名主
　飯塚源九郎
黒谷組觸継名主
　新国五三郎
同組惣代只見村名主
　菅家清蔵
大塩組觸継名主
　小沼雄八
同組惣代山入村名主
　大竹英助

何ら故障（反対や支障などは無い）と聞き及んでおりますが、もしお役所から（越後側へ）お尋ね（お働きかけ）をいただけますならば、越後（新潟）側としても、この道ができることを望む理由があるものと存じます。もっとも、道路工事をお言いつけ（ご許可）いただく際、もしお役所からの役人（出役）を派遣することが難しい状況でございましたら、地元の名主たちのうちから、お役所の差し図（ご指示）のもとで（現場の管理・動員に）お召し使いいただきたく存じます。この道が無事に完成して通行できるようになり、間道（抜け道や取り締まりの難しいルート）の管理・取り締まりがしっかりとできるようになりましたら、私たち「四ヶ組」の一統（全住民）にとって、末永くこれほど有り難く幸せなことはございません。以上。

12　「八十里」と刻された道標2つ

この二つの道標により、八十里越と古檜峠は、つながっていたと考えられる。



寛政十年(一七九八)建立の庚申塔の側面が道標になっている。

左八　大谷　丸倉ミち
右八　会津八十里ミち



長野の道標　新潟県三条市長野　　小林宗一氏撮影

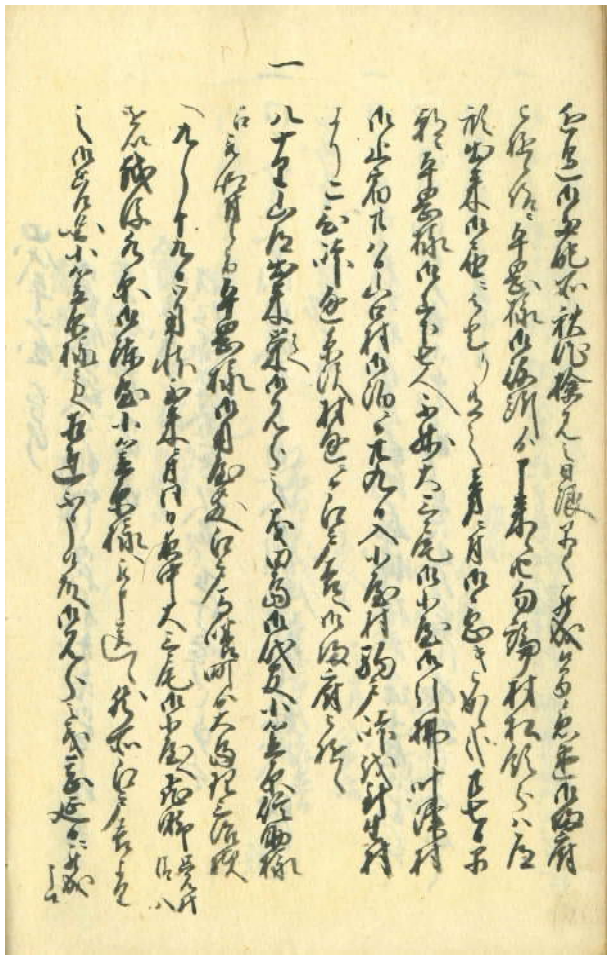




藤生(とうにゅう・南会津町藤生)古檜峠(こび・とうげ)の道標　　南会津町指定文化財
弘化2年(1845)藤生村建立　馬頭観世音の文字碑の台座が道標　　撮影:小林宗一氏

平岡文次郎が八十里越改修見分の帰り古檜峠を通行したことを示す箇所

渡部雅俊氏伝世本



近辺御支配所秋作検見之日限早く罷成候間、急速御帰府被遊候様二、平岡様御役所より申来候由、勿論村松領分八道形出来御届二御登り有之旁二付、御急キ被成候哉、廿七日早朝二平岡様御上下七人不残大三尾御小屋御引拂、叶津村御止宿、廿八日山口村御泊にて、廿九日入小屋村駒戸峠越針生村よりこひ峠通糸沢村通にて江戸表へ御帰府被遊候、

一八十里山道出来栄御見分之義、田島御代官小笠原信助様江被仰付候旨、平岡様御用屋敷江戸馬喰町より大島理三治様へ九月十九日御用状到来二付、同日夜中大三尾御小屋へ飛脚を以越後水原御陣屋小笠原様へ被申送候、然所江戸表より之御差図小笠原様方へ相達不申候故、御見分之義甚延日二罷成申候

近隣の幕領(幕府直轄領)の秋の収穫調査(秋作検見)の期限が早まったため、大至急江戸へお帰りになるようにと、平岡様の御役所から連絡が参りました。もちろん、村松領(現在の新潟県五泉市周辺の村松藩領など)の道路工事が完成した旨を江戸へ届けるために登城される用事なども兼ねているため、お急ぎになったのでしょう。(平岡様の一行は)二十七日の早朝に、平岡様をはじめ従者(上下)七人残らず大三尾の御小屋(臨時の陣屋・宿泊所)を引き払い、叶津(かのうづ)村に宿泊。二十八日は山口(やまぐち)村に泊まり、二十九日には入小屋(いりごや)村から駒戸(こまど)峠を越え、針生(はりゅう)村からこひ(古檜)峠を通り、糸沢(いとざわ)村を通って江戸へお帰りになりました。

一、八十里山道の開削・完成にともなう見分の件について、田島御代官の小笠原信助様へ(幕府から)申し付けられたとの旨が、江戸・馬喰町にある平岡様の御用屋敷から大島理三治様へ九月十九日に御用状(公式手紙)で届きました。そのため、同日の夜中に大三尾の御小屋から飛脚を出し、越後水原(すいばら)の陣屋にいる小笠原様へ(見分の件を)申し送りました。しかしながら、江戸表からの(正式な)指図が小笠原様の方へまだ届いていなかったため、八十里山道の見分の日程は非常に延び延びになってしまいました。

13　写真で見る八十里越



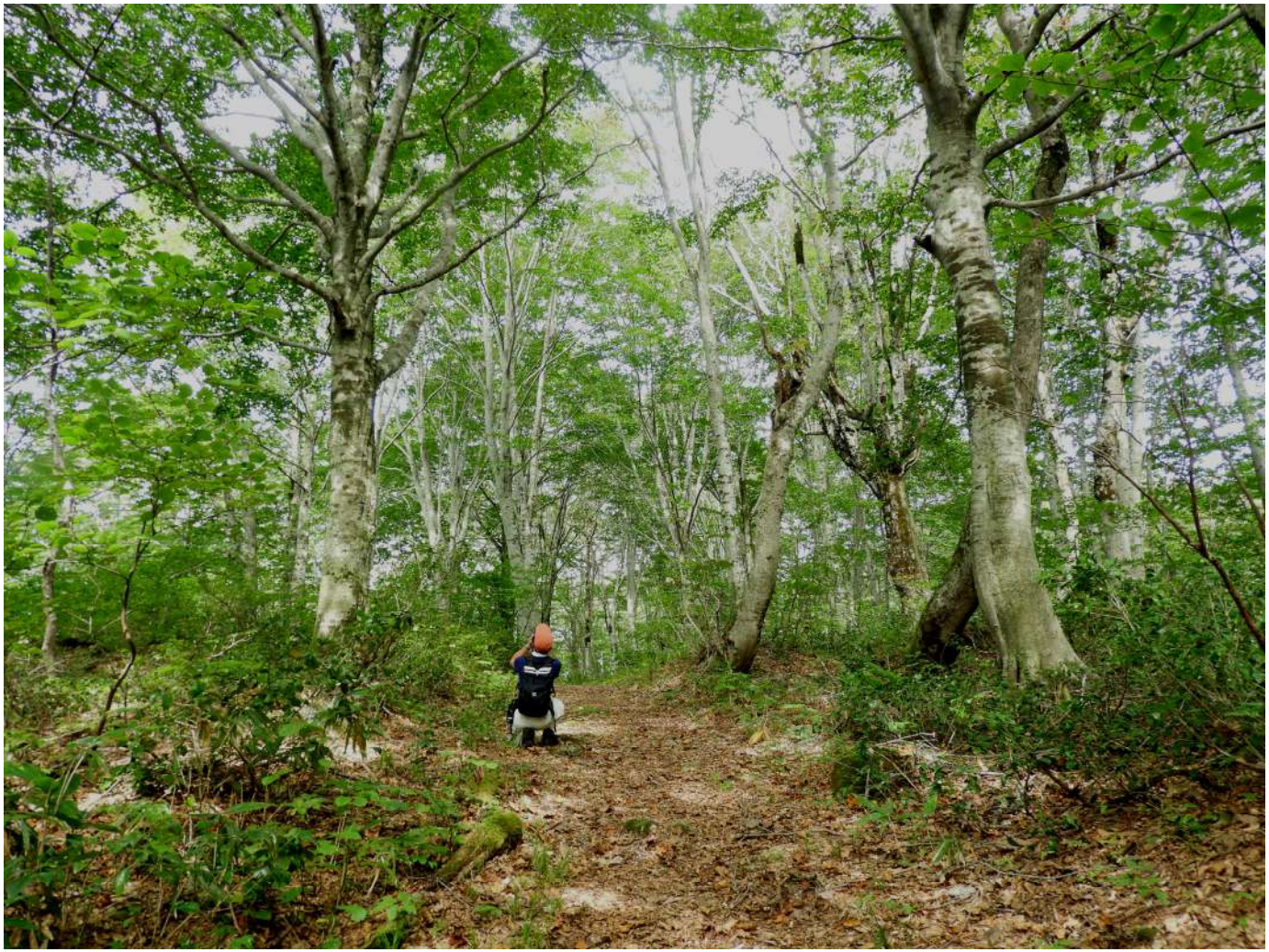
叶津番所　只見町叶津



八十里越の石積み　只見町入叶津



八十里越の道形　只見町入叶津



ブナ林の中を通る八十里越　　只見町入叶津



八十里越　ブナの巨木　只見町入叶津



八十里越　小三本沢　ここを越えると大三本沢に至る　只見町入叶津



八十里越　吉ヶ平村の現在の様子　新潟県三条市
撮影　小林宗一氏



八十里越「村松藩葎谷番所跡」の標柱　新潟県三条市
撮影　小林宗一氏



長野の道標　三条市長野
撮影　小林宗一氏



八十里越は、守門岳から流れる守門川沿いを進む
撮影　小林宗一氏



八十里越を進むと、守門川と五十嵐川の合流地点に巨岩が鎮座。これを「八木の鼻」という

撮影　小林宗一氏